

私は今も、とても幸せです。 —盲導犬リリィの一生—



(H20.9.27 リリィ)

みなさん、こんにちは!!

私の名前はリリィ。現在 13 才です。人間でいうと 80 才ぐらいかなあ。

私は 1995 年 6 月 21 日、ラブラドル・レトリバーの女の子として生まれました。

ところで、みなさんは盲導犬って知っていますか？

実は、私は盲導犬の卵として、この世に生まれました。話は 13 年前にさかのぼります。

私は盲導犬になる子犬を産む「繁殖奉仕」というボランティアをしている家で生まれました。私にはたくさんの兄弟がいました。みんなやんちゃで、毎日お母さんのお乳を取り合ったり、家の中を走り回ったり、お家の人を困らせていました。でも、そんな私たちにお家の人たちは温かく接してくれました。ここで私は、リリィという、ゆりの花を表すかわいらしい名前をつけてもらいました。

2 ヶ月ほどすると、私は協会のスタッフの人に連れられて、小田原の M さんの家に行くことになりました。M さんの家は「飼育奉仕」というボランティアをしていました。「飼育奉仕」の家では、愛情いっぱい私たちを育て、人間との信頼を深めさせてくれます。私は、お庭を走り回って、お花のにおいをかいだり、草とじゃれたり、土を掘ったりすることが大好きでした。時々、夢中になって掘っていると、土管が出てきました。そんな時は、お父さんに叱られました。お父さんは、私が一人前の犬になるように、きちんとしつけをしてくれました。お庭では、せんたくかごをかぶったお姉ちゃんと、にらめっこをして遊んだりもしました。庭先にある門の扉が少し開いていることに気づいて、脱走して家族を困らせたこともありました。小田原では、よく海へ行きました。思う存分に泳いで遊べる海は最高でした。でも、海の水は、しょっぱくて、すぐのどが渴きました。こうして約一年間、毎日 M さんの家族から温かい声をかけられ、一緒に遊び、ひなたぼっこをしたり、昼寝をしたり、レンゲ畑を散歩したりして、たっぷりの愛情を注いでもらいました。おかげで、私は人間が大好きになりました。

1 才を過ぎ、たくましくなった私は、盲導犬になる訓練を受けるため、飼育奉仕の M さんの家を離れました。別れは、とても悲しかったです。みんな涙を流し私を見送ってくれました。一年間の思い出が走馬灯のようによみがえってきました。でも、悲しんでばかり入りません。これから私は、目の見えない人の目となる立派な盲導犬になるため、約 4 ヶ月以上の様々な訓練を受け、たくさんの言葉や動作を覚えなくてはならないのです。訓練は、まずハーネスを付けることから始まり、常に人間の左側

を歩くこと、段差がある所や階段の始めと終わり、必ず立ち止まることを教えられました。「ゴー」「ステイ」など、英語での命令の言葉も30近く覚えなくてはなりませんでした。

それからみなさん、勘違いしないでください。私たち盲導犬の頭の中に地図があって、行き先を告げれば、そこへ自動的に誘導するわけではありません。私たち盲導犬は、主人の命令に従って動くのです。

でも、たとえ主人が「ゴー」という命令を出しても、危険だと判断した場合は動きません。

主人が「ゴー」と命令しても、車が来ていたら、進むわけにはいかないのです。

これを「りこうな不服従」といっています。人間と同じように盲導犬にも、すぐれた判断力が必要なのです。私たち盲導犬は、まさに、主人の命を預かっているのです。

また、主人が障害物にぶつからないように、主人の体の大きさを覚えておくことも重要です。そのための歩行訓練もたくさんします。

様々な訓練を終えて、やっと盲導犬の候補犬リリィの誕生です。

さあ、いよいよ社会へ出て、目の見えない人の目となって活躍です。

(私の主人はどんな人になるのかなあ?)

期待と不安が入り混じっていました。

1997年7月。訓練士さんが一人の女性の前に私を連れていきました。

(きっと、この人が私の主人になるのだわ)

「リリィ。」

彼女が私を呼びました。

私はうれしくなって、しっぽを振りました。

彼女は、にこにこ微笑んでいました。この女性が美幸さんでした。美幸さんは中途失明者で、この4月から浜松の盲学校へ通い始めていました。

二人っきりになった時、彼女は、私に盲導犬を持つと思った三つの理由を語ってくれました。

「一つ目はね、白い杖で歩いていても、時々人や物にぶつかってしまい、とても不安だったの。二つ目は、ちょっとした段差でも、ビックリするほど怖かったの。それから三つ目は、いつも家族に頼って、自由に行動できなかったの。」

彼女は、すでに盲導犬を持っていた友達から、色々なアドバイスを受けていたことも話してくれました。私は、

(ようし、美幸さんのためにがんばるぞ!) と思いを新たにしました。

さっそく、私たちは歩行訓練に入りました。最初は、ペースが合わず、思うように歩けませんでしたが。美幸さんが安心して歩けるように、美幸さんの気持ちになって、細心の注意を払いながら歩くように心がけました。一つ一つの失敗を克服しながら、私たちは、かけがえのないパートナーへと変わりつつありました。

そして、ついに8月8日、正式に美幸さんが私の主人になりました。

盲導犬リリイの誕生の日でもありました。

私は、毎日盲導犬として、一生懸命に仕事をしました。美幸さんはもちろん、美幸さんのご主人や息子さんたちからも、たくさんの愛情を注がれ、充実した日々を送ることができました。疲れて仕事から帰ってきても、家族みんなが私に声をかけてくれました。

(リリイがいて、ほんといやされるよなあ)

(私の方こそ、いやされていますよ!) 私も、美幸さんの家族に感謝しました。

美幸さんは、将来の仕事のため、カウンセラーや相談員の資格を取ろうと東京へも通いました。彼女の足元に座って、一定のリズムで新幹線に揺られていると、私もつい、うとうと寝てしまうことがありました。とても幸せなひと時でした。

でも、なんといっても一番の思い出は、海外旅行です。

生まれて初めて飛行機を見た時、その迫力、音の大きさに驚きました。そして、実際に乗ってみると、離陸と着陸の時の振動にビックリ!!新幹線とはぜんぜん違います。なぜ、こんな大きなものが空を飛ぶのかなあと思いました。

美幸さんとヨーロッパやアメリカに旅行しました。

旅の途中で、すばらしい景色をたくさん眺め、色々な国の人たちとお友達になることができました。8年間楽しく充実した毎日が続きました。

やがて、私は10才の誕生日を迎えました。その頃から、だんだん疲れやすくなってきていることに気づきました。私は、(まだまだ、美幸さんの役に立つようにがんばらなくっちゃ) と思いました。しかし、横浜駅の構内を歩いていた時、疲れてしまい、ついに立ち止まり座ってしまいました。美幸さんは、何かを察したようでした。

美幸さんとお別れの日が近づいていました。

2005年11月、私は盲導犬としての8年半の仕事を終え、引退(リタイア)することになりました。最後の仕事を終わると、美幸さんは私からハーネスを外しました。

「リリイ、長い間ありがとう。今まで本当にありがとう。」

美幸さんは、私を抱きしめて泣いていました。

私は、この言葉を聞いて、(自分の仕事は終わったんだ)と実感しました。

一頭の盲導犬が一生に仕えることのできる主人は、たった一人です。

仕事をやり終えた満足感と同時に、(これから私は、どうなるのかなあ) と思いました。

引退した後、私は不安になり、数日間、ゆるいうんちが出ていました。

私は、藤枝のYさんという家に引き取られることになりました。

Yさんのお父さんもお母さんも、私を見ると、頭をなでながら、やさしく言葉をかけてくれました。

「リリイ、あなたは今日から私たち家族の一員だよ!」

その言葉に、私はしっぽを高く上げ、左右に何回も振り、喜びを表しました。

そして次の日から、ゆるいうんちは、普通のうんちになりました。

一週間も経つと、昔から飼われている犬のようにリラックスしていました。

毎朝、私は 5:30 の目覚ましの音とともに起き、家族が起きてくるのをリビングで待っています。一緒に朝ごはんを食べると、大好きなお散歩です。近くの土手を 20 分ぐらい歩きます。散歩中お母さんは、「リリィちゃんはいいい子、いい子だね〜」と、私の歌を歌ってくれます。お家に帰ると二階で、まずはひと休みです。お父さんとお母さんはお隣の工場でお仕事です。お昼は、おやつをもらっています。お母さんは、時々私の大好きなさつまいもや、みかんや、メロンをくれます。お家の人たちは週 2 回、できあがった製品を町へ納品に行くので、私も車に乗って一緒に出かけています。

お家の人が、いつもと違う服装をしていると、(あっ、今から、お出かけだ!) ということがわかるので、私もお出かけのしたくをします。

こうして Y さんの家にきてから 3 年が経ちました。

昔、盲導犬だったことがうそのようです。

お父さんは、

「盲導犬リリィではなく、甘えん坊リリィちゃんだね。」

と言っています。そんな時は、お父さんの顔を見て、にこにこ微笑み返しています。

先日、家の近くで、自衛隊の航空祭がありました。連帯を組んだ自衛隊の飛行機が上空を横切りました。すごく大きな音でした。

(あれっ、この音、どこかで聞いたことが……)

私は、目を閉じて過去の記憶をたどりました。

すると、飛行機に乗って行ったスイスのアルプスの景色、オランダで見た美しいチューリップ畑、フランスのエッフェル塔が目に見えなくなりました。

そう、美幸さんとの楽しかった海外旅行のことを思い出したのです。

私は興奮して、いてもたってもいられず、家を飛び出しました。

帰宅して、私がいなことに気づいたお父さん、お母さんは大あわてでした。

近所を捜しても私は見つかりません。ついに警察に電話をかけました。

すると、一匹のラブラドルが交番で保護され、本署に輸送されていることがわかりました。それは私です。私は、パトカーに乗って、無事に家に帰ってきました。お父さんも、お母さんもほっとしたようで、何度も何度も私の頭をなでてくれました。

今年のお正月は、お父さんとお母さんが海へ連れて行ってくれました。海を見た瞬間、私の気持ちは高まりました。

「ワン、ワン、ワーン!」

吠えながら海へ飛び込みました。小田原の海を思い出したのです。飼育奉仕の時、M さんの家族と一緒に遊んだ小田原の海を思い出したのです。

お父さんもお母さんもびっくりしていました。

たとえ甘えん坊リリィになっても、幼い時に、かわいがってもらった M さん家族との生活、そして盲導犬リリィとして、懸命に精一杯働いた時のことを忘れることはありません。しっかりと覚えています。

私の記憶の中には、お世話になった心優しいたくさんの方の姿があります。そして今も、お父さんやお母さん、近所の人たちから、たくさんの愛情をもらって生活しています。

私は今も、とても幸せです。

このお話は事実に基づいたフィクションです